

# 私の楽文宣言



天見谷行人

## 私の楽文宣言

---

音を楽しむと書いて「音楽」と読む。

同じように「ブンガク」は「文を学ぶ」と書く。

なぜ「ブンガク」とやらは音楽のように文章を楽しんではいけないのだろう。

私の様な粗雑な思考回路では理解出来ず、何とも敷居の高いものにさえ感じられるのである。

私の個人的な読解能力の限界もあって、いままで「文学」とやらをまともに最後まで読めたのは、数える程しかない。今日こそは世に名高い文学界の名著を読んでやるぞと意気込むのはいいが、たいがい、最初の1ページから早くもつまづく。2ページ目になると、もはやしどろもどろになる。その挙げ句、こんなもん読めるか、と二三ページを読んで放り出す。

それこそ何十年とこういう事を繰り返してきた。それでも、懲りずに未練たらしく、またもや「文学」というものに手を伸ばしては、こっぴどい目に遭う。今までそう言う回りくどい事ばかりやってきている。

それに比べて今どきの若い世代は大変お利口さんで要領もよい人が多いみたいで、スピードと効率、快楽を最優先する。

どうせ、「文学」なんかやったって、いい会社に入れる要件とはならないから当然と言えば当然か。

人生の活力や生きる指針を、純文学などという非効率の極致とも言えるものに対して、ハナから相手にもしないし、期待もしていないようである。

手っ取り早くAKB48とコミックの「ワンピース」があれば事足りるのである。

その他私には分らぬ複雑怪奇な理論によるところの「文は学ぶものである」とする「文学」は、よほどの暇人か物好きしか立ち寄りなくなってしまった。

「しかしなあ」とため息まじりに私は思う。

子供の頃の私にとって、本を読む事は大きな楽しみのひとつだった。

小学生の頃、土曜日のお昼には学校が終わる。

終業ベルが鳴ると同時に、私は校舎内の図書室へ一目散に駆け込んだ。

前々から狙いをつけていた本を貸し出してもらうためである。

当時は、ジュール・ベルヌのSF小説や、「ドリトル先生航海記」等が大好きだった。

図書室の受付のおばさんのところに借りたい本を持ってゆく。

すると、おばさんは丈夫な厚紙で作られた「貸し出し袋」というものに本を入れてくれる。私はそれを抱きしめて、家路につく。一刻も早く家に着いて、本のページをめくりたくてうずうずした。

この土曜日、日曜日、自分が借りてきた本は自分一人が独占して読む事が出来る。そういう秘かな喜びを本は私に与えてくれた。

さて、そんな私も、もはや五十代というオッサン真っ盛りの年代に達した。今や本を見てワクワクする事などほとんどなくなってしまった。

しかし、なぜだろう、今でも小学生の時に読んだ「ドリトル先生航海記」は一年に一度は読ん

でいる。

やっぱり面白いのである。

いい歳したオッサンでも、主人公のスタビンス少年の様に、ドリトル先生の助手になりたいものだと思ってしまう。

恐らくそれはこの本の持つ力でもあるし、私自身がこの本の魅力に取り憑かれているせいであろう。

優れた読み物、思い入れのある本、というのは本来こうあるべきなのだと私は勝手に思っている。

本を読む事は元々楽しいものであるべきなのに、いろんなエライ人達が寄ってたかって、あーでもない、こーでもない、と言って、読書そのものをすっかり訳の分らぬものにしてしまったように思う。

特にそれが目立つのが「純文学」というジャンルなのである。

単に私の脳細胞がうまく活動してくれないだけなのかもしれないが、難解である事、それ自体に価値があると思っているけったいな輩がこの分野には多い。そして重箱の隅を突つくようにして、自らのセカイに閉じこもって仲間内の議論のための議論をしているように思えて仕方がない。

私は本を読んだり本を書いてみたりする事はもっと自由であるべきだと思っている。

そんな私にはすでに「純文学」というのはどこか遠い惑星での出来事のように思えるのである。

ただ、私が懸念するのは、「純文学」とやらが、いつまでもこんなことをやっていたら、本を友人と感じる人をますます減らしてしまう事になるだろうということだ。

私にとって本は無二の親友足り得た存在である。

子供の頃に読んだ本をもう一度読みかえしてみる。

それは古い友人達との巡り会いに似ている。

肩を組み、懐かしいうたでも唄い、酒でも酌み交わしながらじっくりと語り合いたい。そんな気分させてくれる。懐かしい本達との交流は私にとって掛替えのない愛おしい時間である。

私はこれからも何らかの文章を読んだり書いたりしてゆく事だろう。そして出来れば一冊でいい、自分の本を世に出してみたいと切に願っている。

私は昨年「たったひとりのアポロ13」という読み物を電子書籍という形で世に送り出した。

おかげさまで二百を超えるダウンロードがなされている。全く面識のない、通りすがりの方達が、私の読み物に興味を持ってくれた。そしてご自身のパソコンや携帯電話にダウンロードしてくれた。

それは多分、「アマミヤ、この本を読んでやるぞ」という意思表示であろう。

私にとっては信じがたい程の勇氣ある行動におもえる。

ありがたい事である。この場を借りてお礼を申し上げたい。

ただ、電子書籍には残念ながら手に取って眺める事も、紙の香りを嗅ぐ事も、本を小脇に抱え

て森を散策する事も出来ない。

お気に入りの本を一冊手に取ってみよう。

1 ページ、1 ページ、ゆっくりと、いとおしむように紙に折り目を付けないように気遣いながら丹念に活字を追う。

手には本の重みと共に作者の思いさえ感じ取る事が出来る。

紙の本というものには、まさに五感を刺激する何物かがあるように思う。

これからも私は大切な友人に接するように本と接してゆくだろう。

誠に勝手ながら、本に対する個人的な思いをここにささやかな宣言として残しておきたい。

①文を楽しむ事を「楽文」とする。

②書く事を楽しむことを「楽書」とする。

③本を楽しむ事を「楽本」とする。

これらは私が心の中にぶら下げた、自分一人のための行動指針であり目標である。この三つを「私の楽文宣言」とする。

## 私の楽文宣言

<http://p.booklog.jp/book/52804>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52804>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52804>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ